



## 5. 二重目的語構文に於ける項の移動

### 5.1. 受動化

先ず二重目的語構文の受動化についての事実をまとめると、ゲルマン諸語は次の3つに分かれる: (A) 被動者と主題の何れも受動文主語となれる(ノルウェー語等)、(B) 主題だけが受動文主語となる(ドイツ語等)、(C) 被動者だけが受動文主語(アメリカ英語等)となる。本稿の分析の下では、この違いは当該言語が(17)・(18)何れのタイプの構造を許すかという違いに還元される。即ち、(A)類は日本語と同様両方の構造を許し、受動化によって構造対格が吸収された結果、(17)タイプでは主題、(18)タイプでは被動者が主語として繰り上がることになる。日本語との違いは、後者に於いて P<sub>HAVE</sub> ではなく Del が構造対格素性を継承する点で、従って当該言語は二重ヲ格制約の対応物を欠き、能動文でも2通りの格付与パターンが実現する。これに対し、(B)・(C)類の二重目的語構文は1通りの構造しか許さず、前者では(8)タイプ、後者では(9)タイプのみが利用可能なため、それぞれ主題・被動者だけが受動文主語となる。

### 5.2. $\bar{A}$ 移動

同様の不均一性は項の  $\bar{A}$  移動についても見られ、英語の二重目的語構文では(10)のように主題のみが  $\bar{A}$  移動可能なのに対し、ノルウェー語・ドイツ語では(11)のように被動者も問題なく  $\bar{A}$  移動を受けられる。

(10) a. What did you give Mary?

b. \*Who(m) did you give the book?

(11) a. [Hvilken bok]<sub>Th</sub> ga du Jon<sub>Pat</sub>? b. Hvem<sub>Pat</sub> ga du boka<sub>Th</sub>? (cf. Holmberg et al. (2019: 678))

英語とノルウェー語・ドイツ語の間のこの違いは、本稿の分析の下で格素性とその継承について幾つか提案を行うことで説明される。まず、(10)の英語の事実は、(i)素性継承について(12)を採用し、かつ、(ii)英語が内在対格を持たず、主題は被動者と同じく構造対格を付与されるとすれば、 $\bar{A}$  移動の反局所性とラベル付けに於ける主要部の振る舞いから導くことができる。

(12) a. A feature can be inherited to more than one head at once. b. Each feature can be inherited only once.

c. A Case feature is paired with a  $\phi$ -feature so that they behave inseparably with respect to Feature Inheritance.

もし(10b)で被動者が A 移動と  $\bar{A}$  移動の両方を受けるなら、その  $\nu$  位相の構造は(13)のようになるが、Erlewine (2017)の(14)に基づけばこの派生は排除される。被動者の上位2つのコピーが「近過ぎる」からである。

(13) [Wh<sub>Pat</sub> [DP<sub>Ag</sub> [ $\nu$  [DelP [Wh<sub>Pat</sub> [Del [PP Wh<sub>Pat</sub> [P<sub>HAVE</sub> AspP]]]]]]]]]]

(14)  $\bar{A}$ -movement of a phrase from the Specifier of XP must cross a maximal projection other than XP. (Erlewine (2017: 373))

問題を回避するには(13)の下線を引いたコピーの何れかが作られなければよいが、最上位コピーを作らない選択肢は連続循環移動の必要性から排除され、もう一方のコピーを作らない選択肢にも問題が伴う。Del が T や語根と同様に「弱い」なら、その指定部の欠如はラベル決定上の問題を引き起こす(Chomsky (2015))からである。この問題は、「主要部がラベルとなるのは値を欠く素性を担わない場合のみ」とする Mizuguchi (2017)の提案を採用すれば、 $\nu$  から Del へ  $\phi$  素性を継承しないことで避ける余地があるが、上述の(21)の下では、Asp への格素性の継承も起こらない結果を招き、主題が格を得られなくなる。従って派生を救済する方策は無く、(10b)の不適合性が導かれる。これに対し、主題の  $\bar{A}$  移動は問題を生じない。Asp 指定部の主題のコピーは位相周縁部から十分に遠く、(14)の制約に違反しないからである。

一方、ノルウェー語やドイツ語は内在格を有するため、被動者の  $\bar{A}$  移動は上述のような問題を引き起こさない。二重目的語構文が(8)・(9)何れのタイプの構造をとるにせよ、2つの項は一方が構造格、もう一方が内在格を担い、格付与が互いに独立しているからである。よって、(11b)は(11a)と同じく文法的となる。

## 6. 結語

以上では、「教える」類動詞の格付与特性に説明を与えることで(1)–(2)の交替を導出し、更に分析をゲルマン語の二重目的語構文へと拡張すれば、そこでの項の移動可能性が導かれることを示した。

**主要参考文献** Arad, Maya (1996) “A Minimalist View of the Syntax-Lexical Semantics Interface,” *University of London Working Papers in Linguistics* 8, 215–242. / Erlewine, Michael Yoshitaka (2017) “Why the Null Complementizer Is Special in Complementizer-Trace Effects,” *A Pesky Set: Papers for David Pesetsky*, ed. by Claire Halpert, Hadas Kotek and Coppe van Urk, 371–380, MITPL, Cambridge, MA. / Harley, Heidi (2002) “Possession and the Double Object Construction,” *Linguistic Variation Yearbook* 2, 29–68. / Holmberg, Anders, Michelle Sheehan and Jenneke von der Wal (2019) “Movement from the Double Object Construction Is Not Fully Symmetrical,” *Linguistic Inquiry* 30, 677–721. / Maezawa, Hiroki (2020) “Word Order Alternations in English Comparative Constructions,” *Tokai English Studies* 2, 1–13. / Mizuguchi, Manabu (2017) “Labelability and Interpretability,” *Studies in Generative Grammar* 27.2, 327–365.